

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 34号」

<http://jkoga.com/>

平成二十六年十月
第二十四号

< 2014年 10月 >

古賀 順子

ニキ・ド・サンファル回顧展

パリは例年になく暖かい10月ですが、どの美術館も秋の展覧会が盛況です。5年間の大改造工事を終えたマレー地区のピカソ美術館も、10月25日から再開予定です。私は、グランパレで開催中の「ニキ・ド・サンファル回顧展」へ行きました。

ガウディのゲル公園を思わせるヘビの噴水、銃口を向けたニキ・ド・サンファルの挑発的な写真を見ながら、グランパレに入ります。彼女の名前を知らなくても、カラフルで丸々と肥った巨大な「ナナ・シリーズ(Les Nanas)」(nanaは話し言葉で女性の意)は、だれもが見覚えのある作品です。フランス人の父、アメリカ人の母を持つニキ・ド・サンファル(1930-2002)は、ニューヨークのミッションスクールで育ち、作品もアメリカとヨーロッパの両面を有しています。ファッション雑誌「ヴォーグ」「エル」の表紙を飾るモデルをしていた美人で、結婚し、子供もでき、幸せに見えました。1950年代夫とパリに移り、のちに再婚相手となるスイス人ジャン・タンゲリー(1925-1991)のアトリエで、ジャンのアシスタントとして絵を学びます。美術教育は受けたことがないニキでしたが、それを補って余りある創作の力を秘めていました。ニキは、11歳のとき、実の父親に性的暴力を受けていたことを晩年に告白します。主婦として幸せに見えてはいたものの、精神不安定でした。絵を描くことにより、この暗い内面の痛みを乗り越えることができると自覚したニキは、創作に生きることを決意します。

心の奥で陰鬱に頭もたげる暗い過去から抜け出すために、ニキはカービン銃を使った制作を始めます。絵具を袋に入れてキャンバスに掛け、袋に発砲し、飛び散る絵具が作品を創るという方法です。挑発的に見える行為ですが、それは自分自身に銃口を向けること、自己を破壊することで自己を再構築するセラピーだったと語っています。自分が受けた暴力に

立ち向かうことは、社会全体の暴力に抗すること、「キング・コング」(1962年作)は、第二次大戦後の原子力社会への警告、ピカソの「ゲルニカ」のアメリカ版と言えるかも知れません。

過去との決着を付けてから生まれたのが「ナナ・シリーズ」で、1965年最初の作品から生涯をかけて創作が続きます。おおらかで屈託がなく、押し潰されそうな巨大なナナたちは、ニキの理想の女性像です。太古の昔から女性に授けられている原始的な創造力や直感力は、現代社会では踏み潰されている。観念的なもの、男性が押し付けるもの、男性社会をぺちゃんこに潰すパワー溢れる女性、自立した幸せな女性、そんな理想の女性像がナナです。直線や四角四面は男性的だから嫌い、曲線で、肉感的で、天真爛漫な女性を創りたいと彼女自身語っています。そのナナたちには、作者の身近な女性たちの名前が付けられていることが多く、大きさもどんどん巨大になっていきます。回顧展の一環で、アルマ橋7区側のセーヌ川遊歩道に屋外展示されている「踊り子ナナ、東洋の赤、ブルーム」(1995年)は、一番大きなナナで、ニキの性格を受け継いだ孫娘ブルームに捧げられています。ニキの作品は、大きいだけではなく、その中へ入っていけるもの、滑り台として遊べるもの、子供たちを始め、一般大衆の人たちが楽しめる屋外の作品が代表作となっています。自費で制作したイタリア・トスカーナ地方にある「タロット・カードの庭」(1979-1993年作)は、集約的な作品群ですが、大きな作品の見えない金属の骨組みを作っているのがジャン・タンゲリーです。

二人の共同制作は数多くあります。パリ・ポンピドゥー・センター横にある「ストラビンスキーの噴水」(1983年制作)は、二人の魅力が相互補完している例です。マルセル・デュシャン(1887-1968)と同じく、反芸術を目指し、拝金社会を嫌い、何の役にも立たない芸術に徹したジャンとは、夫婦というより、ともに支え合い、競い合う芸術家同士としての強い絆で結ばれていたのです。